

(3) 宮城県石巻市における東京都医師会JMATチームの活動

<http://www.med.or.jp/nichinews/n230720l.html>

この報告は、3月11日～20日、6月13日～16日にJMATの多摩ブロックチーム医療班として石巻入りした、東京都医師会理事 角田徹氏によるものである。

東日本大震災における東京都医師会の災害医療チーム派遣は、震災直後からのDMAT(3月11日～20日に派遣、計18チーム)と東京都医療救護班等の派遣、JMAT(3月22日～6月30日に派遣、計99チーム)の派遣に大別される。JMATチームの内訳は、医師176名、看護師113名、薬剤師29名、事務など124名である。JMATの派遣先は主に宮城県石巻市であり、原則3泊4日の期間で前チームと1日重なるように設定した。すなわち第1日目は前チームからの引き継ぎを受け、第4日目は次チームへの引き継ぎを行うこととなる。班編成は原則として医師1名、看護師2名、事務1名である。宿泊地は、この付近の沿岸地域では唯一津波被害を免れた松島に、東京都医師会として継続的に部屋を確保した。

4月の医療救護活動での担当エリアは旧北上川東地区で、石巻市内でも被災状況の大きな地域であった。その時点でもまだ電気・上下水道共に復旧していなかった。初日に災害救護本部がある石巻赤十字病院に入る。チームのメンバー登録をし、活動に関するオリエンテーションにて新たな地震の際の津波の可能性・自己責任での避難などについて説明をうける。活動拠点となる湊小学校に向かうと、進む程に被災程度がした。湊小学校の校庭はがれきの山であり、たくさんの車がプールや裏の墓地に突き刺さっていた。診療活動は校舎二階の家庭科室で行う。他に日赤第七ブロック(九州沖縄地域)や岡山県医師会など計4チームで診療に当たる。湊小学校に避難している方は約300名で、午前中は全チームがここでの診療に当たり、午後からはこのエリア内に散在する約20か所の避難所を手分けして巡回診療する。小さな社務所や葬祭場の2階などに数10人単位で避難している方々や、1階が全壊している家屋の2階に住んでいる老夫婦などがおり、避難所地域の責任者や近所の住民からの情報が極めて重要となる。

震災から1か月が経っており、医療の対象は気道感染症や胃腸炎・高血圧・糖尿病など、実地医家が対応できるものがほとんどである。高血圧や糖尿病、高脂血症では、治療を中断している方も多数見つけられた。しかし、依然として生活環境や衛生面などの医療以前の問題が復旧されていなかった。医療活動とともに、各救護所の避難者数・食事・衛生状態・生活環境・流行している疾病・各科のニーズ調査などを行い、毎日対策本部に報告し、石巻地区全体での避難状況や疾病状況が集計された。毎晩、本部における全体会議で各エリアの状況報告がなされ、種々の問題に対して行政も同席して議論を行っていた。

(4) 相馬市被災状況と、JAMT活動を通して感じた東北の方々の心意気

<http://www.med.or.jp/nichinews/n230805j.html>

この報告は、静岡県医師会 JMAT として、4 月 1 日～5 日に福島県相馬市県に滞在した、静岡県医師会理事チームの田中孝氏と磯部俊一氏によるものである。

静岡県医師会 JMAT の派遣先は、日医と東北各県医師会の調整により福島県相馬市と決定され、3 月 26 日～5 月 19 日まで、静岡県内郡市医師会から計 15 チームが順番で現地に向かった。実際には 7 月下旬まで 37 チームが編成され出動待機していたが、現地の状況を考え、約 2 か月間で終了した。

・福島県相馬市，被災地の現状

相馬市は福島県の太平洋側最北部に位置し、ほぼ真西に福島市、南に原発 20～30km 圏内の南相馬市が隣接している。また 6 号線を北に向かって走ると約 2 時間で仙台市に到着する。相馬市は漁業と農業を主産業とするのどかな地域で、“野馬追(のまおい)”という祭りで全国的に知られている。相馬市の人口は約 4 万人だが、今回の震災の死亡者と行方不明者は 459 名に及ぶ。しかし地震による死亡者は 1 名のみであり、ほぼ全員の命が津波で失われたことになる。今回の津波は同市の景勝地である松川浦を乗り越え、さらに西側の農地をどんどん這い上がってきた。市内を縦断するように国道 6 号線バイパスが走っているが、この道路は周辺地面より数メートル高く作られていたため、ここで津波がやっと止まったようだ。実際 6 号線バイパスを走ると、西側にのどかな畑の風景が広がり、東側は津波の濁流によって大被害を受けた畑と松川浦がみられる。松川浦南側の磯部地区は周辺に高台のない場所で、津波に対する逃げ場がなく大被害が出た。

・東北の方々の心意気

各避難所を巡回診療すると、多くの避難民の方々が不自由な中で忍耐強く整然と静かに暮らされていた。何度も巡回していると、心を開いて被災の瞬間を話して下さる方もいた。ほんの少しの時間差で自分だけ助かって、一緒に住んでいた息子夫婦を失ったおばあさん。地震後津波警報が出た瞬間に沖に船を走らせた漁船の船長さん。後ろから迫ってくる津波から車で逃げたご夫妻。磯部地区に家を新築したばかりだったのに、命からがら逃げてきたおばあさんとお嫁さん。被災者の皆さんは取り乱すこともなく、静かに津波被害を語ってくれた。東北の方々の謙虚で忍耐強い姿に、日本人の誇りを強く感じた。また自分たちの辛苦にもかかわらず、JMAT に遠い所から相馬まで来てくれて“本当にありがとう”と言われた皆さんの優しさが忘れられない。平和な暮らしが自然の力で一瞬にして全て失われた現実を、皆さんは夢を見ているようだと言った。静岡に戻り、1 日の診療が終わり、自分がいつものように当たり前の生活が出来たことに、感謝の気持ちが心から湧き上がった。JMAT の支援は今回で終わるのではなく、あらゆる機会を通じて支援と友情を送らなければならない。